

船をつくる話

一船、やまにのぼる/森の引越しプロジェクト

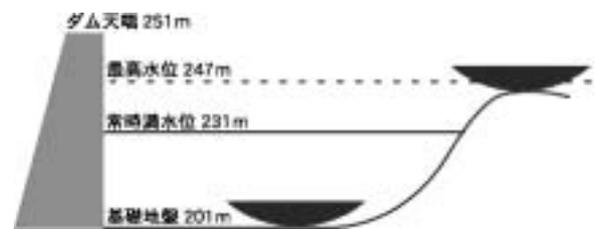
PHスタジオ 代表 池田 修

ダム建設エリアで行っている森の引越しをテーマにした長期プロジェクト。ダム建設により沈む場所で巨大な船をつくり、2005年のダム完成時に行われる湛水実験の水位の力で、山の上に船を移動させる。毎年現地に滞在し、物語のページをめくっていくように少しずつ展開している。



森の引越しのイメージモデル

木が伐採されるという話を聞き、森の引越しについて考えてみようというのが、このプロジェクトの始まりだ。私たちのプランは、これらの伐採される木を使って60m大の筏状の船をつくり、それを山のてっぺんに移動すること。もちろんそれは人力では不可能だが、ダム完成時に行なわれる湛水実験時（ダムの最も高いレベルまで水をためる）に、船を湖に沈んでいる山の上まで移動させることで（実験後は水位を下げるので）、山のてっぺんにのせることが可能になるのだ。



湛水実験の水位の変化と船の移動

船をつくる話のはじまり。1994+1996 (灰塚アースワークプロジェクト)

広島県北東部の山々に囲まれた三良坂・吉舎・総領の3町にまたがる灰塚地域にダム建設が持ち上がったのが三十数年前。長い建設反対の闘争期間を経て、現在は美しいダム湖を残すために様々な人々によってダムエリアの再建プロジェクトが進行しつつある。灰塚アースワークプロジェクトは、建設省とダムエリアの3町が実行委員会を構成し、地域住民やアーティスト、建築家などを招き、この広域の自然と文化をひとつのネットワークで結びつけようと、1994年からサマーキャンプ、ワークショップや環境への提言などをおこなってきた。私たちも94年、96年とこのプログラムに招待され、船をつくる話のプランを考えてきた。

ダム工事に伴い民家や農地の移転が進行するなか、およそ200haの森林が水没し、30~40万本の

船をつくる話 1998

プランは単純だが実際にこのプロジェクトを推進するには、さまざまなハードルがある。どのように木を集めるのか、水に浮いているときはどうするのか、引越すするのは木だけでよいのか、不時着したあとのこと等、地元の人たちや専門家などから、知恵やちからを授からないといけない事柄がたくさんある。この年は主に地元の人々にこのプロジェクトをより広く知ってもらうために、プランの展覧会やシンポジウムの開催、アンケートをとる、家を訪ねてまわる、新聞をつくるなどをおこなった。

船をつくる話 1999—木をあつめる

船をつくる材料は、元口の口径が約10cm、長さ3mから4mの皮を剥いだ松の丸太をおよそ2,700本使う。この年のプロジェクトでは、木を集めている

船をつくる話

一船、やまにのぼる/森の引越しプロジェクトー

PHスタジオ 代表 池田 修

ということをアピールすることを中心に活動した。森林やこの地域に関する動物である象やワニ（さめ）、だるまガエルが登場し、木の提供者を探して、ダムエリア内を約60km訪ね歩いた。そんな話のな



地域の人たちへの説明と対話



「船をつくる話 1999—木をあつめる」の様子。10日間かけて、車や人力での牽引でダム関係エリアにある小学校等を巡った。

か、道路の拡幅工事があるからと、松の林を提供してくださる人があらわれたり、建設省（現国土交通省）もダムエリアの伐採木材を取り置きしてくれたり、少しずつだが木は集まりはじめた。

船をつくる話 2000—船の上の家

3町の合流点にあたる向井橋のたもとの工場跡地に、国土交通省から船の制作場所としての占有許可があり、この年はまず船の上の家を制作した。この家は、船が浮上するときには甲板にのせられるが、当面は船を制作するための準備小屋として機能する。事務作業ができるような小さな家と、丸太の皮剥きができる程度の少し大きな作業小屋を制作した。



人のいなくなったダムエリアにポツネンと小さな準備小屋がたった。

船をつくる話 2001—ふねをつくる

2001年は船本体の制作に入った。人々が引越してしまった後のダムに沈む現地で、長さ60m、幅12m、高さ3mのふねをつくる。ふねといっても森の引越をするための仮の姿だから、トラス状に組んだ立体のいかだのようなものだ。一本ずつ丸太の皮をむきながらボルトで組んでいく作業。約2ヶ月でトラス状の船の構造部分が完成した。



トラス状の大きな構造が現れてきた。

船をつくる話 2002—続ふねをつくる

この年は春と秋の2回の滞在で船本体のデッキ部分の制作とその発表を行った。デッキに使用するひのき丸太の数は約1,700本。太さの違い、まがり、末口と元口の口径の差、これらをうまく組み合わせながらの作業だ。普通の床張りのようには、な

かなかうまくいかない。

デッキはりの作業は一部を残したがほぼ終了した。道をはさんだ向かいにあったダム周辺道路工事の現場事務所も大半撤去されこの丸太の船だけが、ダム底に取り残されている。水がはいつてくるのは二年後だ。



春の日差しが心地よい。作業の合間のしばしの休憩。

船をつくる話 2003—まっているあいだ

「2003—まっているあいだ」と称したこの年は、地域の人たちや専門家と協同して、森の引越しをテーマにいくつかのワークショップを始めた。例えば、「今井家の引越し」というプログラムはダムエリアから再建地へ現代建築として移動された今井家に焦点をあてている。旧今井家にあった草木を丁寧に移動されている今井さんとともに、今井家跡の植物を

船をつくる話

一船、やまにのぼる/森の引越しプロジェクトー

PHスタジオ 代表 池田 修

採取し、染色作業や葛から繊維をとり、それを織ってタペストリー等に展開していくプログラムを行った。また船をステージにして、シンポジウムなどを開催。広島市現代美術館の企画で美術館と旧日本銀行広島支店で展覧会も行った。



船をつくる話2004—2006（今後の予定）

船をつくる話2004—まっているあいだ2

引き続き水のくるまでのまっているあいだに、地域の人たちと協働して、植物や動物の引越しをテーマにワークショップや展覧会を行う予定。

船をつくる話2005—水の上

ダムに水をためる湛水実験は秋からはじまり、順調に進めば翌年の2月には完了する。この間、船は湖の中で漂うことになるが、最高水位に達するときには不時着地点の真上に移動、停留していなければならない。最高水位に達したら水位は1日あたり1mの割合で下げられ、数日で船は尾根の上に不時着するはずだ。この間のプログラムは注意深く慎重な準備と行動を要するが、一方水の上での楽しいプログラムも行っていきたい。例えば地元の神楽団が、船上で篝火を炊いて、舞いながら船を移動するのを祝ってくれるという話もでている。

船をつくる話2006—山の上

不時着がうまくいけば、船は尾根の上に取り残され湖に突き出た半島に鎮座することになる。山側からの作業用の小さな道も整備される予定だ。プロジェクト完了にあたるこの年もここをステージにいくつかの催しを企画していきたい。このあとどうなるかは未定。基本的には数ヶ月の設置期間ののち、解体撤去の予定だが、「朽ちるまでおいておけ、それが本当の意味での森の引越しだ」というくださる地元の方々が増えてきた。



不時着を予定している寺山の様子。木がないのはこの尾根から5基の古墳が出土し、調査発掘がおこなったため。現在は既に草に覆われている。